

## 第4章 小高の哺乳類

大槻晃太

### 1. 調査の概要

哺乳類は、古くから人間と資源を争ってきた。それは、野山の草木やその実、農作物等の奪い合いである。また、哺乳類のなかで中・大型哺乳類、いわゆる「獣」は人間が食料として、また、衣類や薬などとして利用しており、捕るもの、捕られるものという関係にもあった。こうした関係は、「獣」の行動時間を昼から夜へ、里から山へと変えており、捕獲圧の変遷により時代ごとに変化していることがわかっている。このように「獣」、いわゆる哺乳類は人間生活から少なからず多くの影響を受けて生息している。

南相馬市小高区の住民は、2011年3月11日に発生した東日本大震災による東京電力(株)第一原子力発電所の事故により同年3月以降4年間にわたり避難を余儀なくされた。

これにより、多くの哺乳類が山間部から平地に急速に分布を拡大した。こうしたさまは、ニホンザルやアライグマなど、農作物や家屋など人間生活に被害を出す「害獣」に顕著に表れていることが知られている。しかし、その他の哺乳類について、どのような変化があったのかは、あまり知られていない。

したがって、獣と接することの多い小高地区在住の狩猟者に協力を依頼し、東日本大震災前後の大型および中型哺乳類16種について、生息状況のアンケートを実施し、現在の生息状況がどう変化しているのか把握した。

#### (1) 調査方法

猟友会所属の小高区在住の狩猟者30人に対し、『原町市史』『浪江町史』から主要な中大型14種(ニホンザル、タヌキ、キツネ、テン、イタチ、アナグマ、アライグマ、ハクビシン、イノシシ、ニホンジカ、カモシカ、ムササビ、ホンドモモンガ、ノウサギ)と県内で分布が拡大しているアメリカミンクとツキノワグマを加えた全16種について、昭和期、平成前期(震災前)、平成後期(震災後)、それと令和期について、生息の有無、増減の傾向について、アンケート調査を行った。

#### (2) 結果

哺乳類は、福島県内で7目19科54種の生息が確認されている。小高区の近接地をみると、原町区で7目15科30種、浪江町で7目14科27種の生息が確認されている。哺乳類は、移動能力も高く、環境適応能力も高いことから、原町区や浪江町に囲まれている小高区においては、周辺地域での確認状況を加味すれば、おおよその生息状況は把握できると考えられる。よって、14種以外の哺乳類については、『原町市史』『浪江町史』で確認された種は、生息しているものと推定した。

アンケートは、一般社団法人福島県猟友会小高支部に登録されている狩猟者30人に実施した。回答があったのは17人で回収率は56%であった。これにより、11種の在来種(ニホンザル、タヌキ、キツネ、テン、イタチ、アナグマ、イノシシ、ムササビ、ニホンジカ、カモシカ)と2種(アライグマ、ハクビシン)の外来種の生息が確認された。

震災による影響は、震災前後の生息状況で判断した。生息状況は、平成期を震災前後の2つに分け、その時期の生息状況(普通にいた・少なかったがいた・まれに見る程度・いなかった・わからない)と生息数の増減(増えていた・減っていた・変わらない・わからない)の回答者の主観的指標により判断した。

これによると、震災後増加したと考えられる種と、震災前から増加傾向で震災後も増加したと考えられる種があった。前者は、ニホンザルとアライグマで、震災後増加したと答えた回答者はニホ

ンザルで11人（69%）、アライグマで10人（63%）となり、震災前に増加したと回答した2人（13%）、1人（6%）を大きく上回っていた。一方、イノシシについては、震災後が10人（63%）で、震災前が7人と震災後に増加傾向を感じていた人の半数以上は、震災前から増加傾向が続いていると感じていることがわかった。

ニホンザル（写真1）は、人間の圧力に対し、社会性を持つ群れの行動で対峙することで、昼行性を維持している種と考えられる。よって、人間の避難という行動に最も早く対応した種といえるのかもしれない。これは、避難から1か月後には、これまでの生息域から約3 km離れた国道6号線をすでに渡っていたという情報を当時地元住民から聞いたことから推定される。

一方、アライグマは、震災以前から旧原町市エリアで生息が確認されており、空き家への執着が強く、ハクビシンが追い出されているなどの情報もあり、好む環境の増加に適応した結果増加したものと考えられる。

イノシシについては、昭和期からの増加を示唆する人もおり、農村環境の変化や狩猟環境の変化も大きな要因であり、増加傾向があるなかで原発事故の影響として、狩猟圧の減少や耕作者の不在などにより人の圧力の低下が急激に起こった結果と考えられる。これらは、日中行動するイノシシの姿（写真2）が見られることなど、明らかにイノシシの行動が変化したことにも表れている。

震災後に生息数が減少傾向のものとしてキツネ、ウサギを挙げた人が多かった。キツネで7人（44%）ウサギで5人（31%）となった。キツネについては、平成の震災前の状況も少なくなったと感じている人が5人（31%）と多く、以前から減少傾向が続いていると考えられる。原因については、疥癬等皮膚病を記載している人もおり、北海道での疥癬による個体数の減少事例もあることから因果関係を調査する必要があると思われる。

日本の地方の多くでは、対策が間に合わないほど過疎化、高齢化が進んでいる。原発事故に伴う住民の避難は急激にその動きを進行させたとらえることができる。これらの変化は、すべての哺乳類に影響を与えており、人間の生活空間に重なるように生活空間をもつ、特に農作物や家屋被害を生じさせる哺乳類は目に見えるかたちで生息状況が変化した。また、これらの種のなかには、震災以前から生息の増加を示した種もいることから、震災の影響がすべてではなく、これまでも、これからもこうした動きは進んでいくことを念頭に入れ、哺乳類とは適切な関係を築いていくことが求められる。



写真1 ニホンザル（飯館村 2012.5.6 大槻晃太撮影）



写真2 イノシシ（浪江町 2013.8.15 大槻晃太撮影）

## 2. 哺乳類リスト

## 《例言》

◎：2022年12月に実施した福島県猟友会小高支部へのアンケート調査等によって生息が確認された種。

○：各文献において掲載が確認された種（FRDBは「レッドデータブックふくしまII」を指す）。

●：近接地区で生息が確認され、小高区においても生息が推定される種。

△：アンケートで少数（1～2人）から情報があり、確認を要する種。

No.	目, 科, 和名	学名	FRDB ※1 2003.3	原町市史 2005.3	浪江町史 2003.3	小高の自然 2023.3
<b>モグラ目 (7種)</b>						
<b>トガリネズミ科 Crocidura</b>						
1	トガリネズミ	<i>Sorex shinto</i>	○			
2	カワネズミ	<i>Chimarrogale platycephala</i>	○		○	
3	ジネズミ	<i>Crocidura dsinezumi</i>	○	○	○	●
<b>モグラ科 Talpidae</b>						
4	ヒメヒミズ	<i>Dymecodon pilirostris</i>	○			
5	ヒミズ	<i>Urotrichus talpoides</i>	○	○	○	●
6	ミズラモグラ	<i>Euroscaptor mizura</i>	○			
7	アズマモグラ	<i>Mogera imaizumii</i>	○	○	○	●
<b>コウモリ目 (15種)</b>						
<b>キクガシラコウモリ科 Rhinolophidae</b>						
1	キクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus ferrumequinum</i>	○	○	○	●
2	コキクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus cornutus</i>	○	○	○	●
<b>ヒナコウモリ科 Vespertilionidae</b>						
3	モモジロコウモリ	<i>Myotis macrodactylus</i>	○	○		
4	ヒメホオヒゲコウモリ	<i>Myotis ikonnikovi</i>	○			
5	クロホオヒゲコウモリ	<i>Myotis pruinosus</i>	○			
6	アブラコウモリ	<i>Pipistrellus abramus</i>	○	○	○	●
7	クビワコウモリ	<i>Eptesicus jpponensis</i>	○			
8	ヤマコウモリ	<i>Nyctalus aviator</i>	○			
9	コヤマコウモリ	<i>Nyctalus furvus</i>	○			
10	ヒナコウモリ	<i>Vespertilio sinensis</i>	○			
11	チチブコウモリ	<i>Barbastella leucomelas</i>	○			
12	ウサギコウモリ	<i>Plecotus sacrimontis</i>	○			
13	ユビナガクモリ	<i>Miniopterus fuliginosus</i>	○	○		
14	テングコウモリ	<i>Murina hilgendorfi</i>	○	○		
15	コテングコウモリ	<i>Murina ussuriensis</i>	○	○		
<b>サル目 (1種)</b>						
<b>オナガザル科 Cercopithecidae</b>						
1	ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i>	○	○	○	◎
<b>ネコ目 (13種)</b>						
<b>イヌ科 Canidae</b>						
1	タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>	○	○	○	◎
2	キツネ	<i>Vulpes vulpes</i>	○	○	○	◎
3	オオカミ	<i>Canis lupus</i>	絶滅			
4	イヌ ※2	<i>Canis familiaris</i>	対象外			
<b>ネコ科</b>						
5	イエネコ ※2	<i>Felis catus</i>	対象外			
<b>イタチ科 Mustelidae</b>						
6	テン	<i>Martes melampus</i>	○	○	○	◎
7	イタチ	<i>Mustela itatisi</i>	○	○	○	◎
8	イイズナ	<i>Mustela nivalis</i>	○			
9	オコジョ	<i>Mustela erminea</i>	○			

第4章 小高の哺乳類

No.	目, 科, 和名	学名	FRDB ※1 2003. 3	原町市史 2005. 3	浪江町史 2003. 3	小高の自然 2023. 3
10	アメリカミンク	<i>Neovison vison</i>	対象外			△
11	アナグマ	<i>Meles anakuma</i>	○	○	○	◎
12	カワウソ	<i>Lutra lutra</i>	絶滅			
<b>アライグマ科 Procyonidae</b>						
13	アライグマ	<i>Procyon lotor</i>	○	○		◎
<b>クマ科 Ursidae</b>						
14	ツキノワグマ	<i>Ursus thibetanus</i>	○			
<b>ジャコウネコ科 Viverridae</b>						
15	ハクビシン	<i>Paguma larvata</i>	○	○	○	◎
<b>ウシ目 (3種)</b>						
<b>イノシシ科 Suidae</b>						
1	イノシシ	<i>Sus scrofa</i>	○	○	○	◎
<b>シカ科 Cervidae</b>						
2	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>	○			◎
<b>ウシ科 Bovidae</b>						
3	ニホンカモシカ	<i>Capricornis crispus</i>	○	○	○	◎
<b>ネズミ目 (11種)</b>						
<b>リス科 Sciuridae</b>						
1	ニホンリス	<i>Sciurus lis</i>	○	○	○	◎
2	ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i>	○	○	○	◎
3	ホンドモモンガ	<i>Pteromys momonga</i>	○		○	△
<b>ネズミ科 Muridae</b>						
1	ヤチネズミ	<i>Eothenomys andersoni</i>	○			
2	スミスネズミ	<i>Eothenomys smithii</i>	○			
3	ハタネズミ	<i>Microtus montebelli</i>	○	○	○	●
4	カヤネズミ	<i>Micromys minutus</i>	○	○		●
5	アカネズミ	<i>Apodemus speciosus</i>	○	○	○	●
6	ヒメネズミ	<i>Apodemus argenteus</i>	○	○	○	●
7	ドブネズミ	<i>Rattus norvegicus</i>	対象外	○	○	●
8	クマネズミ	<i>Rattus rattus</i>	対象外	○	○	●
9	ハツカネズミ	<i>Mus musculus</i>	対象外	○	○	●
<b>ヤマネ科 Gliridae</b>						
10	ヤマネ	<i>Glirulus japonicus</i>	○	○	○	●
<b>ヌートリア科 Myocastoridae</b>						
11	ヌートリア	<i>Myocastor coypus</i>	対象外			
<b>ウサギ目 (1種)</b>						
<b>ウサギ科 Leporidae</b>						
1	ノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i>	○	○	○	◎
種数等			7月18科47種	7月15科31種	7月14科27種	7月16科28種

※1: レッドデータブックふくしま (FRDB) では、国のレッドリストにおいて絶滅と評価した種および外来種については調査対象種外としている。

※2: イヌ、イエネコの種名、学名については、「日本の哺乳類 改訂版」(1994) から引用した。

【引用文献】

- 阿部 永ほか (2005) 日本の哺乳類 [改訂版], 東海大学出版会, 神奈川県.  
 川田伸一郎・岩佐真宏・福井 大・新宅勇太・天野雅男・下稲葉さやか・樽 創・姉崎智子・鈴木 聡・押田龍夫・横畑泰志 (2021) 世界哺乳類標準和名リスト2021年度版. URL: <https://www.mammalogy.jp/list/index.html>  
 原町市教育委員会文化財課市史編纂室(編) (2005) 原町市史 第8巻 特別編I 「自然」, 原町市, 福島県.  
 塚田英晴ほか (1999) 知床半島のキタキツネにおける疥癬の発生と個体数の減少について, 哺乳類科学39 (2): 247-256.  
 浪江町史編纂委員会 (2003) 浪江町史 別巻I 浪江町の自然, 福島県双葉郡浪江町, 福島県.  
 福島県生活環境部環境政策室 自然保護グループ(編) (2003) レッドデータブックふくしまII, 福島県生活環境部環境政策室 自然保護グループ, 福島県.